

[巻頭言]

## 東日本大震災を経験しての図書館の役割

中部図書館情報学会会長  
名古屋大学大学院教授

伊藤 義人

平成23年3月11日に発生した東日本大震災でお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災されてご苦勞されている方々およびそのご家族の方々に心よりお見舞い申し上げます。

耐震を研究テーマの1つとしている研究者として、また、中部図書館情報学会の会長として、今回の大震災を経験して、大災害時の図書館の役割などについて所感を述べてみたいと思います。

今回は、津波被害が甚大であり、想定外の高さのものが来たとも言われています。しかし、896年の貞観地震(M8.4)の津波被害については、ここ数年で古地震の研究によって3km内陸まで被害があったことが分かってきており、このことはマスコミにも一部報道されており、完全な未知の領域ではなく、十分に周知されず未想定であったということでした。あと少し時間があればもう少しは対策もできたのではないとも言われています。津波自体の被害を防潮堤などの構造物だけで防ぐことは困難であり、地震直後に高い場所に避難することによる減災が不可欠であることは、従来からも言われていました。もちろん、原子力発電所のような重要施設に関しては、電源の全喪失などによる重大事故を防ぐための何らかの別の方策を考えておくべきであったことは最近になって始まっている対策からも明らかとなっています。耐震工学では、想定している最大地震動に対して、機能性と経済性で最適設計をすることが従来の考え方でしたが、それを超える場合の減災対応策も取り入れることが求められているといえます。すなわち、個々の構造物を耐震設計するだけでなく、システムや地域の被災シナリオとその減災を考えるという発想の転換が必要とされていると思います。

今回の大震災で、多くの図書館が大きな被害を受け、未だに開館にこぎつけることができない図書館もあります。東北地方以外にも100万冊を超える書籍が書架から飛び出た筑波大学や国立国会図書館もこれまでになかった状況でした。この未曾有の大震災に際して、図書館はどうあるべきかについて情報発信をしている多くの図書館人がおり、その前向きな姿勢は大変心強いです。地域を支える情報拠点として、図書館が情報発信している例も多く、特筆すべき事例として、この東日本大震災を受け、当初は図書館界から、そしてその後拡張され博物館・美術館(Museum)、図書館(Library)、文書館(Archive)、公民館(Kominkan)(以下、MLAK)の関係者及び支援者によって、被災情報・救援情報を集約した「saveMLAK(3月末まではsaveMLA)」のウェブサイトが立ち上がっていることです。saveMLAKは、被災した施設や人々が、どのような被害を受けているのかという被災情報、また、どのような支援を必要としているのかという救援情報を集め、集約しているとともに、被災した施設や人々に対して、博物館・美術館、図書館、文書館、公民館といった施設やそこに関係している人々ができること、必要と思われる情報を提供しています。

大災害において、まずは人命救助が第一ですが、その後の復旧・復興には正確な情報が必須であり、情報の担い手として、たとえ開館していなくても図書館は重要な役割を果たすことができます。また、被災地域の子供たちへの本の提供などで、図書館界がそのネットワークを利用している例もあります。すなわち、「心の図書館」や「希望の図書館」としての役割を果たすことができます。

最後に、阪神・淡路大震災のときに、神戸大学附属図書館が震災文庫を作ったように、今回の大震災に関しても、復興までの記録を集中して収集して、提供する図書館が必要です。被災地域の復興とともに進化する図書館を目指すことが図書館の役割だと思います。